The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	テ[手]とその周辺
Author(s)	蜂矢, 真郷
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2008, 42, p. 1-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12792
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

テ［手］とその周辺

蜂矢真郷

一

テ［手］とそれに連関するいくつかの語について、上代を中心とする例を挙げて述べる。

梯立の倉椅山を嶮しみと岩懸きかねて我が手取らすも〈和賀弓登良須母〉（記仁徳・六九）

……妹が手を〈伊慕我堤鳴〉我に巻かしめ我が手をば〈倭我堤鳴麼〉妹に巻かしめ……（継体紀・九六）

テ［手］は、被覆形タ［手］に対する露出形である。例えば、『時代別国語大辞典上代編』には「①手。タはその交替形。」「②負傷。受けた傷。」とある。タ［手］の例は、後に第二節に挙げる。

イタテ［痛手］　振熊が痛手負はずは〈伊多弖淤波受波〉鳰鳥の淡海の海に潜きせなわ（記神功・三八）

は、「重いてきず。重傷。」（『時代別国語大辞典上代編』）とされ、「②負傷。受けた傷。」の例になる。テ［手］が傷の意をも表すのは、手が傷を受けやすい場所であるからであろうか。『岩波古語辞典』には、「《手（攻撃）を加えることの意から》」とあるが、必ずしも明らかではない。

中古以降、テ［手］はさらに広い意味に用いられるが、省略する。

他方、道の意のテ［道］は、「手」と表記されることがあり、

ナガテ［長道］　君が行く道の長手を〈道乃奈我弖乎〉繰り畳ね焼き滅ぼさむ天の火もがも（萬三七二四）　ぬばたまの昨夜は帰しつ今夜さへ我を帰すな道の長手を〈路之長手呼〉（萬七八一）

などの例があるが、ナガテ［長道］はナガチ［長路］「天離る鄙の長道を〈比奈乃奈我道乎〉恋ひ来ればあかし明石の門より家のあたり見ゆ」（萬三六〇八）と母音交替ととらえられ、テ［道］はチ［路］「岐（略）道別也知万太」（新撰字鏡）と母音交替ととらえられる。また、方向を表す接尾語テ［方］も、「手」と表記されることがあり、

ウシロデ［後方］　……木幡の道に逢はしし嬢子　後手は〈宇斯呂傳波〉小楯ろかも……（記応神・四二）

などの例があるが、これも接尾語チ［方］「日下部の此方の山と〈許知能夜麻登〉畳薦平群の山の…」（記雄略・九一）と母音交替ととらえられる。そして、接尾語テ［方］はテ［道］の接尾語化したものと、接尾

語チ［方］はチ［路］の接尾語化したものととらえられる。(1)

ところで、テ［手］と、これらテ［道］・テ［方］との関係はどうであろうか。テ［方］は行く道の方向を表すと見られるが、手でその方向を指し示すと見て両者を関連づけてとらえることもできそうである。しかしながら、類聚名義抄に

テ　手テ（平）（観仏下本三八［20ウ］）

チマタ　街チマタ（上上上）（高24オ）

とあり、テ［手］は平声、テ［道］と母音交替ととらえられるチ［路］は上声で、アクセントが異なるので、金田一法則(2)により別語ととらえるのがよいと考えられる。

二

テ［手］の被覆形タ［手］は、基本的に複合語の前項として用いられ、名詞（居体言、すなわち動詞連用形が名詞化したもの、を含む）を下に伴う例、連体の格助詞ナを介して名詞を下に伴う例、動詞を下に伴う例が見える。

まず、タ［手］＋名詞（居体言を含む）の例をいくつか挙げる。

タマクラ［手枕］　……うち行きて妹が手枕〈妹我多麻久良〉さし交へて寝ても来ましを……（萬三九七八 四〇二）

タモ|ト［手本］　……娘子らが娘子さびすと韓玉を手本に巻かし〈多母等尓麻可志〉……（萬八〇四 八〇八）

タツカヅヱ　……手束杖〈多都可豆恵〉腰にたがねて か行けば人に厭はえ かく行けば人に憎まえ……（同）

タクジリ［手抉］　造(二)作八十平瓮 天手抉八十枚手抉此云多衢餌離厳瓮(一)（神武前紀）

タノゴヒ［手巾］　手巾　修復山陵故事云 白紵手巾廿枚(一)手巾和名太乃古比(一)（和名抄・廿巻本十四）

タム|ケ［手向］　恐 みと告らずありしをみ越路の手向に立ちて〈多武氣尓多知弖〉妹が名告りつ（萬三七三〇 三七五二）

右のうち、タモト［手本］は、やや下って、タモト［手本］を覆う衣類の部分を表すところのタモト［袂］　秋の野の草のたもとか花すすきほにいでてまねく袖と見ゆらむ（古今二四三）としても用いられる。タツカヅヱは、手でつかむ杖の意で、〔タ［手］＋ツカ［束］〕＋ツヱ［杖］の構成と

見られる。また、タクジリ［手抉］・タノゴヒ［手巾］・タムケ［手向］は、居体言を下に伴う例である。このうち、タムケ［手向］は、神仏に物を捧げて、特に道中の無事を祈ることを表すが、タムケする場所、すなわち、峠の意となるものである。

次に、タ［手］＋ナ〔連体〕＋名詞の例を挙げる。

タナゴコロ　掌　四声字苑云　掌(一)（略）和名太那古ゝ路　紀私記云手掌太奈曽古　日本手心也（和名抄・十巻本二）

タナスヱ［手端・手末］　是以　有(二)手端吉棄物　足端凶棄物(二)（略）手端吉棄　此云(二)多那須衛能余之岐羅毗(二)（神代紀上）

タナ|ソ|コ［手掌・掌］　手掌憀亮手掌憀亮此云陁那則擧謀耶羅ゝ儞　拍上賜（顕宗前紀）

右のうち、タナゴコロ（和名抄）の例に見えるタナソコ「太奈曽古」は、右のタナソコ（顕宗前紀）の例に基づくと見られる。

そして、タ［手］＋動詞の例を挙げる。

タスク［助］　……天地の神相（あひ）うづなひ　皇祖（すめろき）のみ霊助（たす）けて〈御霊多須氣弖〉……（萬四〇九四）

タヅクル　大和（やまと）の忍（おし）の広瀬（ひろせ）を渡（わた）らむと足結手作（あよひたづく）り〈阿庸比陁豆矩梨〉腰作（こしつく）らふも（皇極紀・一〇六）

タニギル［手握］　……剣大刀腰（つるぎたちこし）に取（と）り佩（は）き　さつ弓（ゆみ）を手握（たにぎ）り持（も）ちて〈多尓伎利物知提〉……（萬八四二八）

〇四）
八〇八

タバサム［手挾・手插］　……梓弓八つ手挾（たばさ）み〈八多婆佐弥〉ひめ鏑（かぶら）八つ手挾（たばさ）み〈八多婆佐弥〉……（萬三八八五）
三九〇七

タヲル［手折］　秋（あき）の野（の）に露負（つゆお）へる萩（はぎ）を手折（たを）らずて〈多乎良受弖〉あたら盛（さか）りを過（す）ぐしてむとか（萬四三一八）
四三四二

これらが表す動作は、いずれも手で行うことと見られる。

右のうち、タスク［助］は、「助（ス）クに接頭語タがついたもの。」（『時代別国語大辞典上代編』）とされて、タスク［助］のタをタ［手］ではなく接頭辞タと見るとらえ方もあり、いずれと見るのがよいか考える必要がある。

それで、接頭辞タ＋動詞の例を挙げることにする。

タバカル［慮・計］　今時深智人 神功二宇（レ）測〈測太波加利〉（霊異記・上序・興福寺本）
［亦罕］

タバシル［激］　霜の上にあられた走（ばし）り〈安良礼多婆之里〉いや増（ま）しに我（あれ）は参（ま）ゐ来（こ）む年の緒長（なが）く（萬四二九八）
四三三

タモツ［有・存］　能ク勝位にして永ク安寧なるを保（タモ）タ令（シ）メ、（西大寺蔵金光明最勝王経平安初期点・春

日政治氏釈文）

タモ|トホル［廻］　……渋谿の崎たもとほり〈佐吉多母登保理〉松田江の長浜過ぎて……（萬三九一一）
四〇二五

これらが表す動作は、タモツ［有・存］を暫く別にして、手で行うことではないと見られる。別にするタモツ［有・存］は、そのタをタ［手］と見る、すなわち、本来、手で持つことを表す可能性も考えられないではない。

また、接頭辞タ＋形容詞の例もある。

タ|ドホシ　……玉鉾の道をた遠み〈道乎多騰保美〉山川の隔りてあれば……（萬三九五七）
三九七九

タフト|シ［貴・尊］　赤玉は緒さへ光れど白玉の君が装し貴くありけり〈多布斗久阿理祁理〉（記神代・七）

タヤスシ［輙］　言に言へば耳にたやすし〈三〈二田八酢四〉すくなくも心の中に我が思はなくに（萬二五八一）
二五八六

これらについては、形容詞に上接するタがタ［手］であることは考えにくいと見られる。よって、

タヨワシ　岩戸割る手力もがも手弱き〈手弱寸〉女にしあればすべの知らなく（萬四一九四三）

は、「〈手弱寸〉」のように「手」と表記されているけれども、接頭辞タと見るのがよいと考えられよう。

ここに、類聚名義抄を見ると、タ［手］は、

タノゴヒ　手巾太能古比（平平上平）（図二七七）

タムケノカミ　道神（丁）タムケノカミ（平平平○○○）（観法下一［2オ］）

タナソコ　掌タナソコ（平平上平）（観仏下本三八［20ウ］）

のように平声であり、接頭辞タは、

タバカル　攉タバカル（上上上平）（観仏下本四○［21ウ］）

タモツ　域タモツ（上上平）（図二二八）

タフトシ　貴タフトシ（上上上○）（高40オ）

タヤスシ　易タヤスシ（上上○○）（観仏中九○［46ウ］）

のように上声であって、アクセントが異なっているので、両者を区別することができる。(3) そして、

タスク　忱多須久（平平上）（図二七三）

のように、タスク［助］のタは平声であるので、『時代別国語大辞典上代編』の述べるところとは異なり、タスク［助］のタはタ［手］と見るのがよいことになる。また、タモツ［有・存］のタは上声であるので、タ［手］と見る可能性もないではなかったが、接頭辞タと見るのがよいことになる。

とすると、下って鎌倉時代以降に見える

テダスケ［手助］　一人御てたすけのためにまいるべきよし仰下さる（はるのみやまぢ［飛鳥井雅有］・弘安三年八月廿六日）

は、タスク［助］の表す意味が手で行う動作の他にも拡大し、タスケのタがタ［手］であることが明確でなくなって、手で行う動作であることを明確にするためにさらにテ［手］を上に伴ったものと考えられる。(4)

タナビク［棚引］　後れ居て我はや恋ひむ春霞たなびく山を〈多奈妣久山乎〉君が越え去なば（萬一七七一）　ここにして家やもいづち白雲のたなびく山を〈棚引山乎〉越えて来にけり（萬二八七二九〇）

は、接頭辞タ＋ナビク［靡］「稲筵川副柳水行けば靡き起き立ち〈儺弭企於己陁智〉その根は失せず」（顕宗前紀・八三）の構成かとも見られるが、タナグモル「噎（略）太奈久毛礼利　又久留　又久毛利天風吹」（新撰字鏡・

享和本）・トノグモル「この見ゆる雲ほびこりてとの曇り〈等能具毛理〉雨も降らぬか心足らひに」（萬四一二三）のような、一面にの意の接頭語タナ・トノがあるので、接頭語タナ＋ヒク［引］「…白たへの袖折り返し紅の赤裳裾引き〈安可毛須蘇妣伎〉…」（萬三九七三）の構成と見る可能性もある。そのいずれと見るのがよいかであるが、

トノビク　大君の命恐み青雲のとのびく山を〈等能妣久夜麻乎〉越よて来ぬかむ（萬四四〇三・防人歌）

の例があるので、後者の構成と見る方がよいと考えられる。類聚名義抄のアクセントから見ても、

タナビク　藹タナビク（上上上○）（観僧上二七［15オ］）

ナビク　弭ナビク（平平上）（観仏中五［4オ］）

ヒク　引ヒク（上平）（高42オ）

のようであるので、タナビク（上上上○）は、タ（上）＋ナビク（平平上）と見るより、タナ（上上か）＋ヒク（上平）と見る可能性の方が高いと考えられよう。

三

トル［取・執・捕］ちはやぶる宇治の渡りに棹取りに〈佐袁斗理迩〉（甲）速けむ人し我が仲間に来む（記応神・五〇）雲雀は天に翔る高行くや速総別鷦鷯取らさね〈佐耶岐登良佐泥〉（乙）（記仁徳・六八）

略トル（平上）（名義抄・高103ウ）

トル［取・執・捕］のトは、タ［手］・テ［手］の母音交替と見られる。すなわち、トル［取・執・捕］は典型的な手で行う動作であると考えられる。類聚名義抄に見えるアクセントも、トは平声であるので、先に見たように平声であるところのタ［手］・テ［手］と母音交替と見ることを妨げない。

さて、そのトは、記紀歌謡においても上代特殊仮名遣の甲乙両例があり、右の古事記歌謡（五〇）の例は「斗」とあり甲類であるのに対して、同（六八）の例は「登」とあり乙類である。

ト（・ド）の甲乙両例が見える語に、他にトフ［問・訪］・トク［解］・アト［足・跡］・タドキ［跡状・態］・イト［甚］などがある。

トフ［問・訪］さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君はも〈斗比斯岐美波母〉（甲）（記景行・二四）相思はずあるらむ君を怪しくも嘆き渡るか人の問ふまで〈比登乃等布麻泥〉（乙）（萬

四〇七五）四〇九九

トク［解］　万代に心は解けて〈許己呂波刀氣氐（甲）〉我が背子が摘みし手見つつ忍びかねつも（萬三九四〇）三九六二　……大刀が緒も未だ解かずて〈伊麻陁登（乙）迦受弖〉襲をも未だ解かねば〈伊麻陁登（乙）加泥［婆］〉……（記神代・二）

アト［足・跡］　……足取り〈阿都圖（甲）唎〉端取りして　枕取り端取りして……（継体紀・九六）　御足跡作る〈美阿止（乙）都久留〉石の響きは天に到り地さへ揺すれ父母がために諸人のために（仏足跡歌一）（5）

タドキ［跡状・態］　大舟の上にし居れば天雲のたどきも知らず〈多度伎（甲）毛思良受〉歌乞我が背（萬三八九八）三九一七　……たまきはる命惜しけど　せむすべのたどきを知らに〈多騰伎（乙）乎之良尓〉……（萬三九六一）三九八四

イト［甚］　天の川いと川波は〈伊刀（甲）河浪者〉立ゝねどもさもらひ難し近きこの瀬を（萬一五二四）一五二八　春の雨はいやしき降るに梅の花いまだ咲かなくいと若みかも〈伊等（乙）若美可聞〉（萬七八六）七八九

トフ［問・訪］のトは、記紀歌謡では全て甲類で、萬葉集には両例が見えるので、本来は甲類である可能性が高いと考えられる。トク［解］のトは、記紀歌謡では全て乙類で、萬葉集でもほとんどは乙類であるので、本来は乙類であると見られる。アト［足・跡］のトは記紀歌謡・萬葉集では甲類であり、仏足跡歌では

乙類であるので、本来は甲類と見られる。タドキ［跡状・態］は、タ［手］＋ツキ［付］の構成と見られるタヅキ［跡状］「梓弓末のたづきは〈末乃多頭吉波〉知らねども心は君に寄りにしものを」（萬二九八五・一云二九九八）の母音交替ととらえられるところからすると、ウ列―オ列甲類の母音交替の多いことから見て、その[6]ドは本来は甲類であると考えられる。イト［甚］は、阪倉篤義氏『語構成の研究』[7]に、甲乙両例に意味の差があるとする説がある。

今一つ、場所を表すト［処］も甲乙両例がある。[8]例えば、クマト［隈処］「葦垣の隈処に立ちて〈久麻刀尓多知弓〉我妹子が袖もしほゝに泣きしそ思はゆ」（萬四三五七・防人歌四三八一）のトは甲類であり、ホト［陰・秀処］「次生(二)火之夜藝速男神(一)夜藝二字以音也（略）因(レ)生(二)此子(一)美蕃登(乙)此三字以音見(レ)炙而病臥在」（記神代）のトは乙類である。

なお、アト［足・跡］は、ア［足］「足の音せず〈安能於登世受〉行かむ駒もが葛飾の真間の継ぎ橋止まず通はむ」（萬三三八七・東歌三四〇五）＋ト［処］（前掲クマト［隈処］の例）の構成ととらえられ、アトのみで足跡・足下の意に用いられる。やや下って、アシアト［足跡］「水ノ北岸ニ盤石ノ上ニ佛ノ脚跡有(リ)、」（興福寺蔵大慈恩寺三蔵法師伝永久四年点・築島裕氏釈文）は、アトが足跡に限らず痕跡・遺跡・背後・前例および後などの意にも用いられるようになり、それらとの区別の必要からアシ［足］を上に伴ったものととらえられる。

このように、本来は甲類と見られるものも、本来は乙類と見られるものもあり、また、上代の中で下る

と甲乙両例が見えるものが多いが、トル［取・執・捕］の場合は、記紀歌謡に甲乙両例があることから見て、本来は甲類であるとも乙類であるとも決めにくいと言える。

ところで、先にタ［手］・テ［手］とトル［取・執・捕］のトとが母音交替と見られると述べたが、この交替は、マ［目］・メ［目］―モル［守・護］―ミル［見］の母音交替に近似している。ただ、ミル［見］に当たるチルの例は見当たらない。モル［守・護］については、後に第四節にふれるところがある。

四

タク［手］　大舟を荒海に漕ぎ出で八舟たけ〈八船多氣〉我が見し児らがまみは著しも（萬一二六六三七〇）

……石瀬野に馬だき行きて〈馬太伎由吉氐〉をちこちに鳥踏み立て……（萬四一五四四一七八）　たけばぬれ〈多氣婆奴礼〉たかねば長き〈多香根者長寸〉妹が髪このころ見ぬに掻き入れつらむか（萬一二三一）　振分の髪を短み青草を髪にたくらむ〈髪尓多久濫〉妹をしそ思ふ（萬二五四〇二五四五）

タク［手］は、船を漕ぐ意、馬を操る意、また、髪を整えるなどする意に用いられているが、これらはいずれも手で行う動作であり、タ［手］が動詞化接尾辞クを伴ったものと見られる。『時代別国語大辞典上代編』には、「髪タク・舟タク・馬タクの三つを、もとは同じ何か手の動作をあらわす語と考えることは許さ

れるであろう。」とあり、『岩波古語辞典』には、合わせて「《腕を働かして事をする意》」とある。舟タク・馬タク・髪タクに限らず、手を働かせて事を行う意と見ることができる。

タタク　……そ擁（だた）き〈曽陁多岐〉擁（た）き抜（まな）がり〈多々岐麻那賀理〉ま玉手玉手（たまでたまで）さし巻（ま）き……（記神代・三）

……妹（いも）が手（て）を我（われ）に巻（ま）かしめ　我（われ）が手（て）をば妹（いも）に巻（ま）かしめ　真栄葛（まさきづらた）、擁（あざ）き又はり〈多々企阿蔵播梨〉

……（継体紀・九六）

タタク［叩］　門（かど）をたゝきて、くらもちの皇子（みこ）おはしたり、と告（つ）ぐ（竹取物語）　驚(二)彼沙門(一)叩(二)室戸(一)白〈叩（タヽキテ）〉（霊異記・下十七・真福寺本）

タタク（記神代・三、継体紀・九六）は、叩く意、手抱く意、あるいは、撫でる意、抱擁する意のようにいろいろな解釈のあるところであるが、前書『国語重複語の語構成論的研究』(9)に見たように、タタク［叩］も含めて、タク［手］のタ［手］の重複が動詞化接尾辞クを伴ったものととらえ、タク［手］の反復（・継続）を表すと考えたい。

なお、タタクとともに用いられるマナガルは、マヌカル「一切の怖畏を脱（マヌカ）ル、こと得む。」（西大寺蔵金光明最勝王経平安初期点・春日政治氏釈文）と連関してとらえられる可能性もあろうが、「未詳。」（『時代別国語大辞典上代編』）とされる。同じくアザハル「群言紛（マカヒアサハ）糺リテ異議舛（タカヒ）ニ馳（ハ）ス。」（興聖寺蔵大唐西域記十二平安中期点・曽田文雄氏釈文）は、「もつれあう。からみあう。交差する。」（『時代別国語大辞典上代編』）

の意とされる。

前書にも見たが、これとは別に、タタクをタ［手］＋タク［手］ととらえる説がある。福田良輔氏「「ソダタキ・タタキ」管見」[10]がそれで、「「タタク」は「手」と手を働かす意味の四段活用動詞「タク」との合成語であって、「手を働かせ（つづけ）る」ことを意味するものであり、「手抱く」とは意味を異にする動詞と解すべきである。」と述べられる。土橋寛氏『古代歌謡全注釈古事記編』[11]も、「タクが「手ク」であることが忘れられると、新たに上に「手」を冠して「手タク」となったものであろう。」とされ、福田氏が「撫でる」意に、土橋氏が「抱擁」の意に解するという差違はあるが、タタクをタ［手］＋タク［手］ととらえる点では同様である。

土橋氏前掲書は、マモル［守・護］「…木の間もよい行き目守らひ〈伊由岐麻毛良比〉…」（記神武・一四）に対して、「モルは元来（略）見守る意であるが、用法が拡大されて守る意に用いられるようになると、見守る意を表わすのに目を添えて「目守ル」と言い、そのマモルの用法がまた拡大されて守る意味に用いられると、上に見を添えて「見守ル」となる。「手ク」が「手タク」となる（記3）のと同じ過程であろう。」とも述べられている。マモル［守・護］が、「目＝守ルの意。」（『時代別国語大辞典上代編』）とされるように、メ［目］の被覆形マ［目］＋モル［守・護］「筑波嶺のをてもこのもに守部すゑ〈毛利敝須恵〉母い守れども〈波播已毛礼杼母〉魂そ合ひにける」（萬三三九三・東歌）の構成ととらえられることを合わせ考えると、タタクをタ［手］＋タク［手］の構成と見る可能性はあると見られる。

しかしながら、前書に見たことであるが、[12]

ツク［突］　大魚よし鮪突く海人よ〈斯毗都久阿麻余〉其が離れば うら恋しけむ鮪突く志毗〈志毗都久志毗〉（記清寧・一〇九）―ツツク［啄］　……しただみをい拾ひ持ち来て 石もちつつき破り〈都追伎破夫利〉……（萬三八八〇）

フク［吹］　狭井川よ雲立ち渡り畝火山木の葉さやぎぬ風吹かむとす〈加是布加牟登須〉（記神武・二〇）―フフク［噴］[13]　雨風いみじく降りふゝく（蜻蛉日記）　噴（略）ハク　フ、ク（平平上）　フキクタス　フク（平上）（名義抄・観仏中二八［15ウ］）

などのように、一音節語基が動詞化接尾辞を伴ったものと、同じ一音節語基の重複が動詞化接尾辞を伴ったものとが対応する例が他にいろいろ見えるところからすると、タク［手］―タタク（タタク［叩］を含む）もその対応の中に入れられて、タタクは一音節語基であるタ［手］の重複が動詞化接尾辞クを伴ったものととらえるのがよいと考えられる。

今、十分には述べられないが、意味の「拡大」[14]、ないし、意味が「忘れられる」ことに対して、拡大した意味のものと区別する、ないし、意味を明確化するために、同様の意の要素を上に伴う場合に、全く同じ形態の要素を上に伴うのではなく、先にふれたテ［手］＋タスケ［助］、アシ［足］＋アト［足跡］、マ［目］＋モル［守］、ミ［見］＋マモルなどのように、何らかの形で形態の異なる要素を上に伴うのが通常である[15]

かと見られる。その点から見ても、タ［手］＋タク［手］ととらえるよりは、タ［手］の重複がクを伴ったものととらえるのがよいと考えられよう。

タタカフ［戦・闘］……木の間もよい行き目守らひ　戦へば〈多多加閇婆〉我はや飢ぬ……（記神武・一四）　有(二)一大僧(一)　執(レ)斧毆(レ)父〈毆太ミ加不〉（霊異記・上五・興福寺本、国会図書館本は〈毆打也〉）

タタカフ［戦・闘］は、タタク［叩］が反復・継続を表すフを伴ったものととらえられる。『岩波古語辞典』は、「《タタキ（叩）に反復・継続の接尾語ヒのついた形。相手を繰り返してたたく意。（略）》」（タタカヒ［闘・戦］の項）としている。タタク［叩］＋アフ［合］の約まったものと見る可能性もありそうであるが、右の日本霊異記の例は、叩き続ける意と見られて、タタク＋フの構成ととらえる方がよいと考えられる。スマフ［住］「天離る鄙に五年住まひつゝ〈周麻比都ミ〉都のてぶり忘らえにけり」（萬八八〇）が、スム［住］「他国は住み悪しとそいふ〈須美安之等曽伊布〉速けくはや帰りませ恋ひ死なぬとに」（萬三七四三七）＋フの構成ととらえられ、スム［住］＋アフ［合］の約まったものとはとらえにくいことと合わせて見る際に、ある場合は～＋フ、ある場合は～＋アフ［合］の約まったものととらえるより、いずれも～＋フととらえるのがよいと考えられよう。タタカフ［戦・闘］の古事記歌謡の例のように、意味の上でタタク［叩］＋アフ［合］ととらえられそうなものは、反復・継続、とりわけ反復の場合に、その動作の主体が常に一定であるとは見ないことでよいと考えられる。

（二〇〇八・九・二）

注

（1）テ［道］・チ［路］、接頭語テ［方］・同チ［方］については、別稿(一)「チ［路］とミチ［道］」（『萬葉集研究』30［二〇〇九年三月 塙書房、予定］）参照。

（2）金田一春彦氏(一)「現代語方言の比較から観た平安朝アクセント――特に二音節名詞に就て――」（「方言」7―6［一九三七年七月］）・(二)「類聚名義抄和訓に施されたる声符に就て」（『日本語音韻音調史の研究』［二〇〇一年一月 吉川弘文館］第二編二、もと橋本博士還暦記念会『国語学論集』［一九四四年一〇月 岩波書店］）・(三)「国語アクセント史の研究が何に役立つか」（『日本語音韻音調史の研究』［前掲］第三編一、もと『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』［一九五三年五月 三省堂］）参照。金田一氏(三)には、

《ある語が高く始まるならば、その派生語・複合語もすべて高く始まり、ある語が低く始まるならば、その派生語・複合語もすべて低く始まる》

とある。

（3）これらのことについては、別稿(二)「日本霊異記訓釈「波リ天」考」（「訓点語と訓点資料」80［一九八八年六月］）にふれたことがある。

（4）尤も、現代語のテダスケ［手助］は常に手で行う動作であるとは限らず、さらに意味が拡大したと考えられる。

（5）国宝「仏足石」に対して、国宝「仏足跡歌碑」であるので、「仏足石歌」とせず、「仏足跡歌」とした。

（6）別稿(三)「ト［門］とト［戸］とト［外］」（「京都語文」14［二〇〇七年一一月］）参照。

（7）［一九六五年五月 角川書店］第二篇第二章第二節

（8）注（6）別稿(三)に、ト［処］とされる例のいつくかはト［門］ととらえられることについて述べたので、それを別にして考える。

（9）［一九九八年四月 塙書房］第三篇第四章

（10）「文藝と思想」（福岡女子大学）18［一九五九年一一月］

（11）［一九七二年一月 角川書店］

（12）ただ、前書には、タタク［叩］とツツク［突］とが母音交替ととらえられると述べたが、タタク「叩タ、ク（平平上）」（名義抄・観仏中四二[22ウ]）、ツク「踵ツク巽（上平）」（同・図一〇九）のように、タタクと、ツク［突］のツの重複が動詞化接尾辞クを伴ったものがツツクと見られるところのツクとはアクセントが異なるので、そのように見るのは難しい。ここに訂正する。

なお、タタクの語頭のアクセントは平声で、タ［手］の重複がクを伴ったととらえる場合にも、タ［手］＋タク［手］ととらえる場合にも、タ［手］と一致している。

（13）フフク［噴］は、下ると、フブク［吹雪］「Fubuqi. u. uita. 雪を伴って風が吹く。」（日葡辞書）のように、第二音節の清濁も、雪を伴うか否かの意味も変化する。

（14）土橋氏前掲書は「用法」の「拡大」とされるが、意味の「拡大」とする方がよいと考えられる。

（15）下る例であるが、近世以降に見える「湯（ゆ）＋湯婆（たんぽ）」の「湯（ゆ）」と「湯（たん）」や、（下に伴うものであるが）同じく「豌豆（ゑんどう）＋豆（まめ）」の「豆（とう）」と「豆（まめ）」や、徳島の名産である「竹（たけ）＋竹輪（ちくわ）」の「竹（たけ）」と「竹（ちく）」のように、音訓が異なるものもある。

（文学研究科教授）

SUMMARY

The Noun *Te* and It's Surrounding Words

HACHIYA Masato

The Noun *Te* [手], which means *hand*, is a Bare Form (*Roshutsu-kei* [露出形]), and the Noun *Ta* [手] is a Covered Form (*Hifuku-kei* [被覆形]). The Covered Form *Ta* is different from the Prefix *Ta-* [タ-], because the Pitch Accent of the Covered Form *Ta* is high (*Jōshō* [上声]) and the Pitch Accent of Prefix *Ta-* is low (*Hyōshō* [平声]).

The Verb *Toru* [取ル] means *take*. I guess that *To* which is a part of the Verb *Toru* is made by changing the Vowel of the Covered Form *Ta* and the Bare Form *Te*.

The Verb *Taku* [タク] means *row a boat*, *handle a horse* and *fix hairs*. We use hands to do these actions. I interpret that *Taku* is a constituted word, that is, the Suffix *-ku* [-ク] is coupled with the Covered Form *Ta*.

The Verb *Tataku* [タタク] means *knock* etc., and we use hands repeatedly to do these actions. I interpret that the Suffix *-ku* is coupled with the Reduplication of the Covered Form *Ta*.

キーワード：テ[手]、タ[手]、トル[取・執・捕]、タク[手]、タタク